

研究者の意識の変化

日本熱測定学会会長
ダイセル化学工業(株) 小沢丈夫



わが国の高度経済成長が始まった頃、1965年における研究開発従事者の総数は約15万人であった。それから30年、現在では総数はおよそ55万人に達している。この30年間に3倍以上に増加している。この間の人口増加は小さいから、この総数の増加はGNPの増加と関連づけて論ぜられている。また、この間における大学、国公立研究機関の研究開発従事者数も、横ばいもしくは漸減傾向にあると思われるから、この増加の大部分は民間企業における研究開発従事者の増加によるものと考えてよいであろう。

さらに10年前、1955年頃の状況を思い出してみると、ようやく戦後の混乱を脱して研究が軌道に乗り始め、トランジスタ電子計算機の研究などが始められた時期であるが、「好きな研究をさせてもらっているのだから、給料が安くても仕方がない。」といった発言が研究者にみられた。つまり、世間一般の人が辛い生業に従事しているのに、浮き世離れして好き勝手なことをやっているのだから、給料が安く、研究費が少なくても文句は言えないというのである。研究者は浮き世とは別の所に暮らしていた。

最近あまり読まれなくなったが、人間喜劇などの一群の写実小説で知られる19世紀前半のフランスの小説家、オノレ・ド・バルザックの「絶対の探求」には、自分の趣味であるダイヤモンド合成の研究に従僕と共に没頭し、ついには財産を蕩尽しても志を遂げられず(当然のことながら)、死んでいく貴族の姿が描かれている。小説の方は健気な長女が家運を再興し、最後に先祖伝来であったチューリップの球根のコレクションも買い戻すところで終わっている。「給料が少なくても」という言葉を聞く度に、この小説を思い出したが、意識としてはこの時代と繋がっていたのではないだろうか。

世間が研究者という種類の人間を見る目も同じようなものであったようである。数学者岡潔をモデルとした日本映画は超俗的な岡潔との交渉を通して俗世間の人間をカリカチュアとして描いているが、自然科学者全体が似たような姿でとらえられていたと思う。その点では、最近、定年退職後に自宅に実験室を作る人を散見するが、世間一般から見ればこれも大部変わった存在に見えるのかも知れないし、旧世代の研究者らしいとも言える。

1965年頃は民間企業における中央研究所ブームである。もう、さすがに浮き世離れした声は聞こえなくなっ

た。研究は浮き世の一部に組み込まれた。実験機器も高額になり、個人ごとの研究よりはグループでの研究が常態となった。それでも研究者の多くは大学と国公立研究機関に属していた。つまり、彼らは給与は恵まれないが、研究をほぼ一生の仕事とすることを前提としていた。したがって、研究が好きで、自分の個人的関心からの研究テーマが社会的意義と合致しているとして予算要求を行っていた。研究は公の仕事であるが、自分の仕事でもあった。

さらに30年が立つと、研究成果で世界一の大富豪となるという成功物語も現れて、研究開発が民間企業の社運を左右しかねないものとなった。55万人の研究開発従事者の大半は、民間企業の従業員となった。これらの人々は、生産、営業、企画、調査などの他の仕事と同様に、研究も業務として課せられたものである。これは以前から問題とされていた若手研究者の学会離れの一因でもある。この点は欧米と異なる日本の特殊事情である。人の流動性がある欧米では企業は変わっても研究職という職種に就いているが、日本では各人がフレキシブルに職種を変えている。場合によっては変わることが社内制度化され、研究は一時の仕事である。

このような意識の変化が、個人参加の学会への入会にも多少の変化をもたらしている。企業が会費を負担する個人会員の出現である。企業による会費の負担は給与の一部とみなされるから、これは取扱いによっては所得税法の問題となるという別の問題も含んでいるが、業務として与えられた研究を行う上で必要という観点から見れば、その費用負担は企業が行うというのも、それなりに当然の論理的帰結である。逆に、大学や国公立研究機関の研究者は、学会における成果発表によって初めて自己実現できるから、自己負担による学会加入は当然のこととされた。自分の仕事でもある研究を円滑に進め、成果を普及し、研究を社会の中に正しく位置付けるために、自前で金を出し合って学会を作り、ボランティアとして奉仕するのが、これまでの学会であったが、30年間で変容の要因が出てきていると言えよう。論文数の指数関数的増大による、人口爆発ならぬ論文爆発の可能性と共に、よく議論しておかなければならない問題ではないだろうか。以上の議論は、問題を明らかにするために一面的に割り切り過ぎているきらいがあるが、一つの問題提起としたい。